

発行日：令和2年2月15日 発行人：かとうファミリークリニック

新型コロナウイルスを「正しく恐れる」

今年に入り新型コロナウイルスのニュースが連日センセーショナルに報道されています。これまでの情報と今後考えられることをまとめてみたいと思います。

●まずはじめに

本記事は2020/2/14時点での情報を基に作成しました。今後状況が変化する可能性が十分にありますので、最新の情報に十分ご注意ください。

●これまでの経過

2019/12/31 12月以降、中国湖北省武漢市にて原因病原体の特定されていない肺炎の複数発生が報告

2020/1/9 原因が新型コロナウイルスであると中国当局より発表

2020/1/16 日本国内で1例目の報告

2020/1/28 国内感染事例(武漢滞在歴なし)の報告

2020/1/31 WHO「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」と発表

2020/2/13以降 国内初の死者(80代女性)や医療関係者の感染などの報告が相次ぐ

●「水際対策による封じ込め」が困難な理由
特異的な症状に乏しく、感染しても肺炎を発病しない無症候例・軽症例が存在すること、潜伏期間の長さなどが挙げられます。つまりSARS・MERSなど、これまでの新型肺炎と異なり、新型ウイルスに感染していることに気づかないうちに、他の人に感染してしまっている可能性が高いと推測されます。

●感染予防にできること

まずウイルスを身体の中に入れないこと、飛沫感染・接触感染対策が重要です。コロナウイルスは風邪のウイルスの仲間ですから、インフルエンザ対策と同じくマスク・手洗い・うがい・消毒(アルコール消毒)が有効です。こまめな換気・室温や湿度にも注意を払いましょう。そして日頃からの体調管理、十分な栄養・休養が重要になるでしょう。しかし残念ながら目に見えないウイルスからの完全な防御は不可能です。感染初期には風邪と同じく、葛根湯などの漢方薬で抵抗力を上げることで対処できるかもしれません。

●私たち医療関係者にできること

国内での感染拡大が現実的なものとなってきた現在「重症者をいかに早期に見つけケアするか」という段階になってきていると思います。医療機関には新型肺炎だけでなく、他の病気の患者さんも存在するわけで、院内感染を防止し、さらに医療資源を有効活用するためには、風邪症状で済んでしまう軽症の場合には受診や検査は行わず経過を見るという判断も必要になるのではないかと考えています。

●報道を見て思うこと

昨今のテレビやインターネットでの情報には事実に基づかないものや非現実的な意見が多々見受けられると個人的に感じます。特にテレビのワイドショーでは、専門知識を有しないコメンテーターはまだしも「感染症診療に精通する」などとテロップで紹介されるゲスト医師ですら、臨床現場での不確実性や検査の限界(検査体制や精度、偽陰性・偽陽性の問題など)も解さない「机上の空論」をあたかも正論のように振りかざしているのが目に余り、非常に憂慮すべきことだと思います。このような情報に振り回されず、正確な情報を得てアップデートし、パニックにならず「正しく恐れる」姿勢が私たちには必要なのではないでしょうか。

●最後に

本記事を作成するのにあたり私が参考にさせていただいた、現状を冷静に分析し、信頼できる情報を発信しておられる感染症領域の専門医の先生方をご紹介します。お名前が容易に検索できますので参考にしてみてください。

- ・厚生労働省ホームページ
- ・岩田 健太郎先生(神戸大学)
- ・押谷 仁先生(東北大学)
- ・尾身 茂先生(元WHO事務局長)
- ・大曲 貴夫先生(国立国際医療研究センターにて実際のコロナウイルス感染の診療にあたっておられます)

未知の病原体との闘いはまだ始まったばかりです。英知を結集して困難を克服するためには「病者を区別・差別」するのではなく各国が連帯・連携することが必要だと思っています。